

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22300209

研究課題名(和文) スポーツ実践における人間の生の経験を生かした身体教育と人間形成に関する研究

研究課題名(英文) Physical education and character building through the human living experience in sport practice

研究代表者

畑 孝幸 (Hata, Takayuki)

岡山大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00156332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,100,000円、(間接経費) 1,530,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、スポーツにおける「他者との交流」や「コミュニケーション」によって得られる人間の多様な生の経験が、体育における「心と体の問題」の解決に向けて貢献できるのだという観点から、「スポーツと人間の生の経験」、「スポーツの教育的価値」、「体育における人間形成」について考察した。スポーツにおける自己の達成は他者との連帯に発展することを明らかにし、スポーツにおける人間の多様な生の経験を体育という人間形成の営みに取り込むことで、われわれも児童・生徒が直面する「心と体の問題」の解決に向けて貢献できるという知見を得た。

研究成果の概要(英文)：In this study, from the viewpoint that the living experience of human beings in sport, which is experienced by the communication or activities with others, contributes to solve the issues of mind and body problem in physical education, such themes as sport and living experience of human beings, educational value of sport, and the character building in physical education was examined. We found out that the issues of self-performance and self-achievement in sport developed the solidarity with others. We also had several knowledge in physical education that we can contribute to solve the children's mind and body problem by teaching them in a physical education class through the living experience of human beings in sport practice.

研究分野：健康・スポーツ科学

科研費の分科・細目：身体教育

キーワード：体育 人間形成 スポーツ実践 身体性哲学 哲学的人間学

1. 研究開始の当初の背景

本研究の背景には、「いじめ」や「不登校」「校内暴力」「非行」「学級崩壊」という現象について、学校教育の現場では出口の見えない難問が山積状態であるということがあった。「いじめ」や「暴力」が原因で児童・生徒たちが死に追いやられる悲惨な事件が後を絶たない。このような状況の下で児童・生徒たちは、自らの学びを阻害され、「生きる力」を耕せない状況に陥っているといっても過言ではない。この教育の荒廃の背後にある「心と体の問題」に対処すべく、体育においても「心と体の密接な関連」という理念を追求することによって、児童・生徒が直面する問題状況の打破に貢献しようとした。「多くの問題に直面する児童・生徒に対して体育は何ができるのか」、「公教育としての体育の教育責任とは何か」ということが強く問われることになったのである。しかし実際の授業における具体的な実践の場面では、何をどう指導すれば「心身の関連」という理念を実現できるかという戸惑いもあり、また「心と体を一体として捉える」「自分や仲間の体や心の状態に気付く」という場合の「捉える」「気付く」ということに関する哲学的問題の検討も不十分なままに残されていた。こういう問題の検討をしたうえで、果たして体育に何ができるのか、そういう疑問に答えてみたいというのが本研究の動機であった。

これまで体育はその時々での社会的要請を受け入れながら何がしかの人間形成を行ってきた。わが国でも、スポーツの人格形成の可能性に着目しながら、それを体育に適用しようとした試みが早くからあり、島田は体育で目指すべき人間像として心身の調和の取れた徳を身につけた人間を描いている(島田, 1926)。児童・生徒の人格形成という総合的な視点からの明確

な方法論を備えた体育論の再構築や、スポーツと人間とのダイナミックな関係構造のなかでの体育における人間形成の可能性についての研究が欧米でも行われてきた(Arnold, 1997)。

しかしながら、わが国と欧米の双方において、スポーツにおける人間の生の経験と人間形成の可能性についての検討は行われていないのが実情である。本研究の背景には、スポーツを含む人間の生の経験と達成についての哲学的人間学からのアプローチ(Lenk, 1983, 1985, 2002)や、それに影響を受けて行われたわれわれの研究(Sekine & Hata, 2004)があり、これらの成果をさらに発展させ、スポーツなどの運動技能の習得や倫理規範の教育を中心としてきた従来の体育論を越えた、新たな体育論を示そうとする意図が本研究にはある。つまり本研究は、哲学的人間学というこれまでとは異なる新しい視点から体育論を模索しようとする非常に先駆的な研究である。こうした研究は国外にも例がなく学術的にみても国際的に非常に画期的で独創的なものである。

2. 研究の目的

本研究では、スポーツを教材とする体育でなければ成しえない人間形成の意義を再確認するために、児童・生徒の「心と体」の問題が人間的な存在への問いと不可分であるという認識に立ちながら、スポーツ実践における人間の生の経験とスポーツを教材とする体育における人間形成の可能性について検討しようとした。具体的には、スポーツにおける「他者との交流」や「コミュニケーション」によって得られる人間の多様な生の経験を、体育という人間形成の営みに取り込むことで、われわれも児童・生徒が直面する「心と体の問題」の解決に向けて貢献できるのだという観点

から、「スポーツと人間の生の経験」「スポーツの教育的価値」「体育における人間形成」について考察しようとした。

3. 研究の方法

本研究は四年の期間を設けて行った。その際に五つの研究課題を設定した。一年目の平成22年度は、(1)「心身を一体として捉える」とはどのようなことか、(2)「体や心への気付き」とは何かということについて明らかにした。二年目の平成23年度は、(3)他者との交流を必然とするスポーツ実践における人間の生の経験とは何かということが明らかにされた。三年目の平成24年度は、(4)「生きる力」を育む体育におけるスポーツによる人間形成の可能性について検討した。そして四年目の平成25年度は、(5)体育でなければ成しえない人間形成の意義について明らかにしようとした。

4. 研究成果

(1)スポーツを教材とする体育でなければ成しえない人間形成の意義を再確認するために、児童・生徒の「心と体」の問題が人間的な存在への問いと不可分であるという認識に立ち、スポーツ実践における人間の生の経験と体育における人間形成の可能性について検討した。体育において「心身を一体として捉える」こと、「体や心への気付き」とは何かについて、文献をレビューしながら検討した結果、それらは自分自身や他者とのコミュニケーションと深く関わっていることが明らかになった。また、スポーツにおいて人間の生の経験を重視することは、他者について配慮したり、他者の身体について注意を払ったりしながら、人間形成を図るこ

とができる可能性を秘めていることが明らかになった。

(2)「他者との交流を必然とするスポーツ実践における人間の生の経験とは何か」について文献をレビューしながら検討した。スポーツが人間の生に対して持つ意味の一つに自己の達成への志向があるが、人間の生は自己に関わる事柄のみで構成されるものではなく、他者との関係からも構成されることから、スポーツにおける自己の達成が他者との連帯に展開することを明らかにした。他者との連帯は、体育においては、他者の身体に配慮することができる身体を作ることを体験することによって可能であることを明らかにした。

(3)スポーツ実践における人間の生の経験と人間形成の可能性について、特に「いじめ」や「非行」の被害に直面する児童・生徒に対して体育は何ができるのかということについて、研究の手順を確認することができた。また「スポーツ実践における人間の生の経験とは何か」について明らかにした。さらに「『生きる力』を育む体育におけるスポーツによる人間形成の可能性」について検討を進め、スポーツにおける人間の生の経験が体育において持つ意義について明らかにした。

(4)体育でなければ成しえない人間形成の意義については次のようなことが明らかになった。スポーツにおけるコミュニケーションは、自己の達成に向けての身体的行為や自他の連帯に向けての身体的行為によって可能になる。体育では集団によって具体化される意味の存在が重要である。体育において勝敗の意味や集団での達成を学習するスポーツ教材が、他者理解のためのコミ

ユニケーションを提供する可能性があることを明らかにした。

(5)この研究課題によって得られた成果の一部は、「5. 主な発表論文等」に示したように国内外で発表した。今後の課題としては、身体教育と人間形成の関係についてより深く考察することがあげられる。

文献

Arnold, P. (1997). Sport, Ethics and Education. Cassel

Lenk, H. (1983). Eigenleistung. Edition Interfrom

Lenk, H. (1985). Die achte Kunst. Edition Interfrom

Lenk, H. (2002). Erfolg oder Fairness? Lit

Sekine, M. & Hata, T. (2004). The crisis of modern sport and the dimension of achievement for its conquest". International Journal of Sport and Health Science. 2, pp.180-186

島田正藏. (1926). 體育原論. 大同館書店, p.23

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

Sekine, M., and Hata, T. (2012). What we can get in sport: Between victory and achievement. Portuguese Journal of Sport Sciences. 12

(Suppl.), 164-166

関根正美. (2012). 社会性が育つ学習集団を考える ハンス・レンクの集団的達成の思想を手がかりに . 体育科教育. 60(3), 32-35

Hata, T., and Sekine, M. (2010). Philosophy of sport and physical education in Japan: Its history, characteristics and prospects. Journal of the Philosophy of Sport. 37(2), 216-224

関根正美. (2010). スポーツ思想を読み解く試み スポーツ思想のこれまでとこれから . 現代スポーツ評論. 23, 36-48

[学会発表](計9件)

Hata, T., and Sekine, M. (2013). Athletes' mental and inner satisfaction and their solidarity in modern sport. International Association for the Philosophy of Sport (41st Conference). September 4-8, Fullerton, USA

Sekine, M., and Hata, T. (2013). Sport as thought. World Congress of Philosophy (23rd Congress). August 4-10, Athens, Greece

Hata, T., and Sekine, M. (2012). What can we get from defeat in competitive sports?. 2012 国際運動哲学学術研討会. December 22-24, Taipei, Taiwan

Hata, T., and Sekine, M. (2012). What we can get in sport: Between victory and achievement. International Association for the Philosophy of

Sport (40th Conference). September 12-15, Porto, Portugal

Sekine, M., and Hata, T. (2011). Excellence, health, and doping. European Association for the Philosophy of Sport. (1st Conference). May 21, Prague Czech Republic

関根正美. (2011). 危機的時代状況とスポーツ ヤスパースの場合 . 日本体育・スポーツ哲学会. (第 33 回大会). 8 月 19 日. 長崎市

Sekine, M., and Hata, T. (2011). Japanese baseball as martial arts. International Association for the Philosophy of Sport. (39th Conference). September 9, Rochester, USA

Hata, T. (2010). Zen and the sphere of achievement based on the human firsthand experience in sport practice. International Association for the Philosophy of Sport. (38th Conference). September 18, Rome, Italy

Sekine, M. (2010). Existence of sports in the periods of economic domination. International Association for the Philosophy of Sport. (38th Conference). September 17, Rome, Italy

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

畑 孝幸 [HATA TAKAYUKI]
長崎大学・教育学部・教授
岡山大学・教育学研究科・教授

(平成 2 5 年 1 0 月 ~)

研究者番号 : 0 0 1 5 6 3 3 1

(2) 研究分担者

関根正美 [SEKINE MASAMI]
岡山大学・教育学研究科・教授
日本体育大学・体育学部・教授
(平成 2 5 年 4 月 ~)
研究者番号 : 5 0 2 9 4 3 9 3

(3) 研究協力者 (海外共同研究者)

ハンス・レンク
[HANS LENK]
カールスルーエ工科大学名誉教授

グンター・ゲバウアー
[GUNTER GEBAUER]
ベルリン自由大学教授

フォルカー・シュールマン
[VOLKER SCHUERMAN]
ドイツスポーツ大学教授